

## 教養ゼミナール(ワークショップ)のねらいと展望

白杉 悦雄 | Etsuo SHIRASUGI

教養ゼミナールは、2005年度前期から本学で実施された、新入生を対象とする初年次教育科目である。導入の背景と経緯、および2010年度から導入した農芸クラスのねらいについては、本学紀要第20号の特集で報告した。本稿では、2011年度から導入したワークショップ・クラスのねらいについて述べたい。

### 1. 身体知の再評価

2005年度に始まった初年次教育科目・教養ゼミナールは、2010年度に農芸クラスが加わったことで、おおきく方向を転換した。農芸クラスを実際に運営した教員たちの体験によって、教養教育における「身体知」の重要性が認識されたからである。教養教育の内容や方法を見直した結果、「言語や書物を通しての知的訓練を中心とする教養とともに、身体知としての教養を重視する」という方向性が打ち出された。

その結果、教養ゼミナールは、「身体性、意欲、自主性、社会性」の4つの力を自らの内から喚起し、体得することを目的とする科目として再編され、2011年度から、農芸クラスとワークショップ・クラスの二本立てで再スタートすることになる。

### 2. 身体知の言語化

#### —自己評価シートと学習ポートフォリオの導入—

ワークショップのキーワードは、参加、体験、相互作用であるが、それで終わりではない。体験は、振り返りによる気づきを経て、言語化され概念化されなければならない。

再編後の教養ゼミナールでは、すべてのクラスに、その日の体験を言語化する「自己評価シート」と学期末に自分の学習活動を振り返る「学習ポートフォリオ」の提出を義務づけている。体験したことや感覚したことを言葉にし、それを繰り返すことで、体験や観察の質を深める。そして、なによりも重要なことは、何が必要か、何が自分に足りないのかを、自分で気づくことができることである。

#### 学生の声

- ・この授業を受講して、コミュニケーション力が身につきました。相手の意見を聞き、自分の意見を言う。これが一番大事だと、改めて実感しました。もっと相手に伝わる話し方など、自分に足りないものを改善できるように、自分を磨いていきたいと思います。
- ・この授業で私は、自主的な発想の大切さを再認識できた。また、教室にはさまざまな学科のさまざまな人がおり、その人たちを通じて、多方面からものごとを捉えることが大切であるということを、再確認できた。

上の文章は、学生の学習ポートフォリオから抜粋したものである。かれらの文章は、共通して、気づきや学びあいが確かにあったことを教えてくれる。「ここで学んだことを先の4年間に精一杯活かして、大学生活を送りたい」。本当にそうであることを願っている。

### 3. ディレクターとファシリテーターの起用 ーチーム・ティーチングー

ワークショップ・クラスの教員体制について説明すると、1人のディレクター（専任教員）と2人のファシリテーターがチームをつくって、3人で2クラスを担当するチーム・ティーチングを採用した。授業で行うワークショップのプログラムは、ディレクターとファシリテーターと一緒に考え、さらに全体の授業計画と各回の授業運営について話し合いを重ねていく。このようなチーム・ティーチングは、本学の教養教育においては、はじめての試みである。

2010年度後期に、ワークショップ・クラスの内容と方法を検討するワーキング・グループを立ち上げた。グループのメンバーを選定するにあたって、実際にワークショップを運営したことのある経験者、若手教員、この2つを条件とした。そして、この条件に該当し、クラス運営を引き受けてくれそうな教員を学内で探した。ワークショップ・クラスのねらいとコンセプトを説明して依頼していくと、声をかける順に「引き受ける」との返事が返ってきた。予定していた5人のディレクターの席はすぐに埋めることができた。ディレクターが決まれば、つぎはファシリテーターの選定である。

### 4. OB・OGの起用

ワークショップのキーワードは、参加、体験、相互作用である。1クラス30名前後の学生を活動させるためには、進行・促進役のファシリテーターの存在が重要である。われわれはその人材を、大学の近隣に在住する本学の卒業生の中に求めた。呼びかけに応じて集まった卒業生たちは、地元でデザイナーや美術の非常勤教員として働く、30歳前後の若者たちである。

OB・OGの起用に期待されるメリットは、いくつか考えられる。まず、年の近い親切なお兄さん・お姉さんが声をかけてくれることで、入学したばかりで緊張している新入生は、第一週の授業からクラスの雰囲気や溶けこめる。また、

OB・OGは、新入生にとって、5年後あるいは10年後の自分の姿を想像するためのよいロールモデルでもある。OB・OGのファシリテーターたちも、自分たちが新入生だったころのことを思い出し、進んで的確な授業支援を行うことができる。事実、前期の授業を終わってみれば、彼（女）らがとてもよい仕事をしたことが明らかになった。毎学期末に行う「学生による授業評価アンケート」におけるファシリテーターにたいする評価は、5段階評価で4.7～4.8と高い数値を獲得している。

そして、ディレクターにとっても、ファシリテーターとのチーム・ティーチングには大きなメリットがあった。教養ゼミナールのクラスは、2学部9学科の学生が混在する混成クラスである。毎年、どのような雰囲気になるのか、予測がつかない。したがって、クラス運営には、たいへんなエネルギーを必要とする。特に最初の年は、学生からどんな反応が返ってくるか、見当がつかなかった。ところが、ファシリテーターと一緒にプログラムや運営を相談していくことで、この不安は、かなり解消される。学生に年齢の近いファシリテーターの反応を見ることで、学生の反応を先取りできるからである。

### 5. おわりに

ワークショップ・クラスには、じつは、「隠れたねらい」があった。教員の教育力の向上である。教養ゼミナールの担当を依頼している若手教員の専門分野における能力の高さは分かっている。そうした優秀な若手に、異なる学科の学生で構成されるクラスを担当させたとき、どのような化学反応がおこるか。学生同士が互いの多様性に気づくだけでなく、教員にも気づきや学びがあるのではないか。他の学科の学生を知ることで、大学全体について考えることができる教員に成長してくれるのではないか。そうした期待があった。そして、その期待は、裏切られなかったとおもう。

また、ファシリテーターの起用とチーム・ティーチングにも「隠れたねらい」があった。OB・OGの卒業教育である。地域に残って頑張っている卒業生に、能力向上のための教育機会と活躍の場を与えることも、送り出した側の責任である。ディレクター（専任教員）と学生は、ファシリテーター

(OB・OG)にとってよい教育的な刺激になるであろう。また、ワークショップそのものが、彼らの能力の向上に寄与することはまちがいない。

教養ゼミナール(ワークショップ)は、学生が成長する場であるばかりではなく、ディレクターとファシリテーターも成長できる場として、今後も機能させていきたい。そのための改善にも努めていく。

芸術・デザイン系大学における初年次教育として、教養ゼミナール(ワークショップ)は、本学にほぼ定着したといえるであろう。また、本号のこの特集は、ワークショップの事例集として、今後の改善のための土台となるだろう。さらに、今後も事例を積み重ねて、プログラムの選別を繰り返していけば、芸術・デザイン系大学だけではなく、一般大学や中学・高校の導入教育として、使用に耐えるものになる可能性もあるのではないかと考えている。その可能性は、小さくはないと確信している。

[執筆者]

白杉 悦雄

Etsuo SHIRASUGI

教養教育センター

Center for Liberal Arts

教授

Professor

◎特集：参加、体験、そして相互作用—教養ゼミナール(ワークショップ)の挑戦



「雲の作り方」プレゼンテーションをグループごとに行っている様子。



「チーム結成！」自然物を用いてチーム名を造形して提示している様子。

◎特集：参加、体験、そして相互作用—教養ゼミナール(ワークショップ)の挑戦



写真4-1



写真4-2



写真4-7



写真4-8



写真4-3



写真4-4



写真4-9



写真4-10



写真4-5



写真4-11



写真4-6



写真4-12



写真4-13



写真4-19



写真4-14



写真4-15



写真4-16



写真4-17



写真5-1



写真5-2



写真4-18

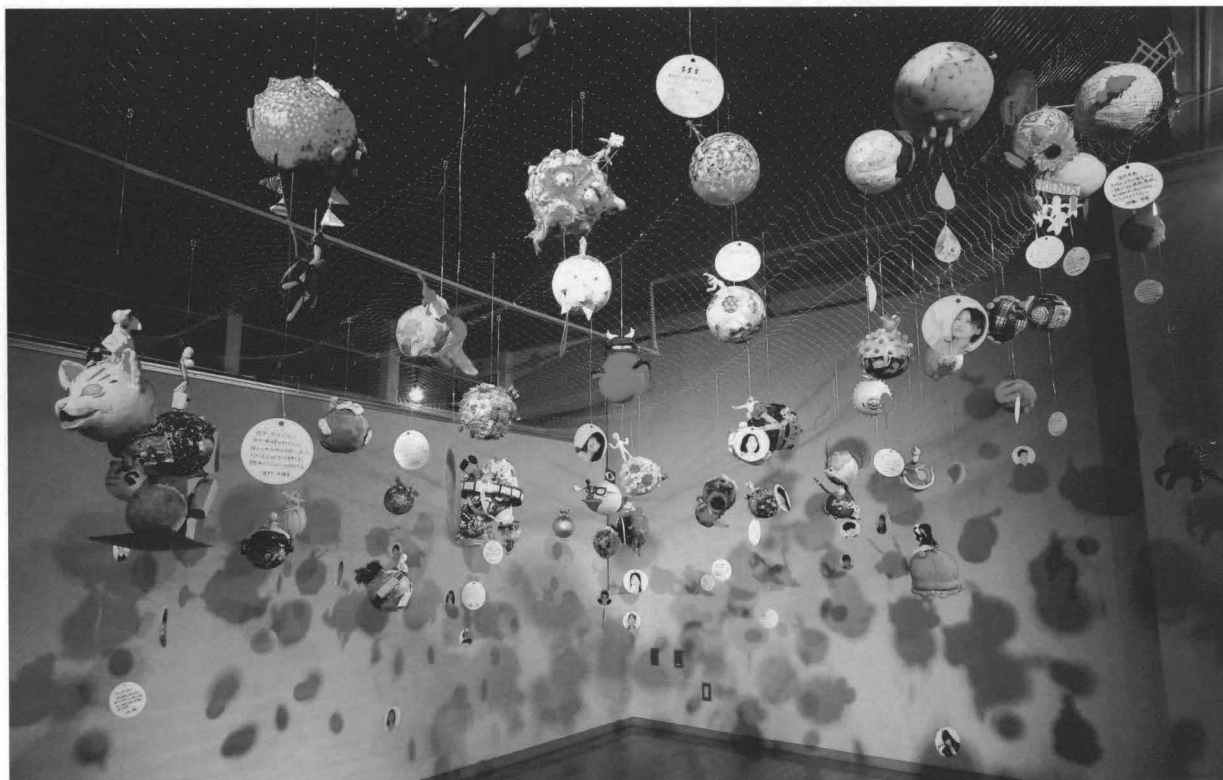


写真5-3

◎特集：参加、体験、そして相互作用—教養ゼミナール(ワークショップ)の挑戦



美大の教養展「新しい〇〇の仕方 四十八手」展示風景



美大の教養展「自分の頭の中の世界」展示風景



「龍神祭」本学の裏山(瀧山)は昔から龍の住処であり、この地を守護していると伝えられている。この龍神様に感謝の気持ちを込めて、手作りの衣装を身に纏って大学構内を練り歩くパフォーマンスを行った。



「身体表現／パフォーマンス」自画像のお面を被ったパフォーマンス後の記念写真。自分の誕生の瞬間から大学入学までの自分史をライフラインを参照にしながら振付符を作り、全身を使って表現した。



◎特集：参加、体験、そして相互作用—教養ゼミナール(ワークショップ)の挑戦



グループで話し合っ言葉の地図を作る。



クラス作品展示の設営作業。皆で協力して作品を組み立てる。